

まち歩き観光における資源と自治体の意図に関する研究 —東京 23 区を対象として—

The resources in City Walk Tourism and the intent of the local governments
-Case study on the 23 wards of Tokyo-

皆藤 藍
KAITO Ai

1. はじめに

(1)研究の背景

マス・ツーリズムへの弊害と観光ニーズの多様化と社会の変化にともない新たな観光形態として登場したのが、少人数によるオルタナティブ・ツーリズムである¹⁾。オルタナティブ・ツーリズムは、主に個人で能動的に行動し、その対象は、地域の個性ある歴史、自然、生活、景観、産業などの日常的に地域に存在しており、その地域を形成する資源である。オルタナティブ・ツーリズムが目指すものは、「モノ」の見学と一般的な消費行動だけではなく、地域に根ざした固有の資源とそれに関わる人々との交流・学習を通して体験することである。こういった背景にともない、自治体は、現存する資源を上手く活用しながら、魅力的観光の創造に積極的に取り組んでいる。以上のような流れの中で、観光の面からみると、まち歩きは、オルタナティブ・ツーリズムの中に位置付けることができる。まち歩きによる観光(まち歩き観光)は、観光客が日常的な「まち」に目を向けて、そこに存在する魅力ある資源を歩いて能動的に発見し、それを独自の視点で楽しむという新たな観光形態であるためである。また、「まち歩き」そのものは観光行為だけでなく、主に地域住民が今まで認識していなかった資源を発見する「宝探し」の手法の 1 つとしても捉えられている²⁾。

まち歩き観光における資源は、「まち」に存在する様々なものも資源となりうる。本研究では、まち歩き観光における資源を大きく 2 つに分類する。1 つ目は顕在的資源であり既に公的に価値が認められているもの、または各自治体が整備しており、観光目的でなくても人が集まるようなものとする。2 つ目は潜在的資源である。顕在的資源に対して、公的に価値が認められておらず、例えば視界に入ってい

ても、特定の範囲のみにしか認識されていない資源とする。地域の生活文化などと関わりがあるようなローカルな資源である。地域の生活文化などと関わりがあるようなローカルな資源であり、見る場所と見られる対象によって成立する景観や地形などである。景観は、まち歩き観光では重要な資源となり得る。特に都市域においては、自然の景観に注目するのではなく、まちの歴史や文化を感じさせる景観や自然と都市が融合した景観、さらには人々の暮らしぶりが垣間見られる景観があり、まち歩き観光によって資源となる可能性を十分秘めている³⁾。

まち歩き観光は、顕在的資源と潜在的資源という 2 つのタイプの資源を結び付け、それらを連続的に体験させることによってまちの魅力を無限に楽しませるといった特長を有している。また、本研究において定義付けたまち歩き観光は、ガイドが付くのではなく個人で歩く自由度の高いものを指している。

(2)研究の目的・対象

(i)目的

本研究は、東京 23 区から抽出した 4 タイプの代表区において、定義したまち歩き観光の特長に基づき、自治体がまち歩き観光に寄せる期待と資源の選定の関係性を明らかにし、自治体がまち歩き観光の特長を活かした資源選定を行っているかを確認し、都市におけるまち歩き観光のあり方を考察することを目的とする。

(ii)対象

東京 23 区の各区、観光協会のホームページから閲覧・ダウンロード可能なまち歩きコースを対象とした。まち歩きコースの提供があったのは、18 区で、総計 204 コースであった。そして、18 区の総計 204 コースを以下の 3 つの条件で分析対象を絞り込んだ。1 つ目は観光目的であるまち歩きコースを対象とす

ることである。2 つ目は、ガイドの案内によるまち歩きコースを除くことである。3 つ目は、コース設定がなされているということである。以上 3 つの条件によって、16 区、総計 161 コースを分析対象として抽出した。港区の 34 コースが最大で、文京区・墨田区の 4 コースが最少であった(図 1)。

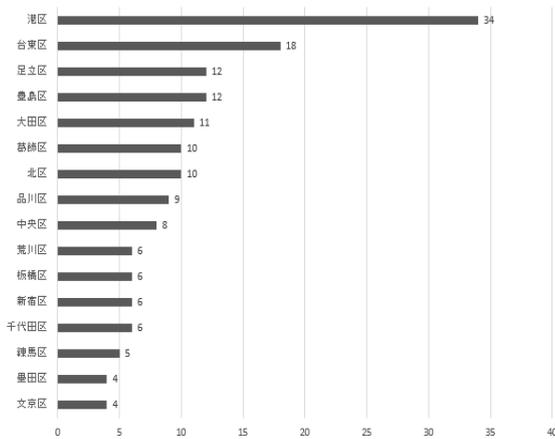


図 1 コース数(16 区)

(3) 研究方法

定義したまち歩き観光の特長を活かした資源活用がなされているかという観点から、自治体のまち歩き観光の捉え方をヒアリングで明らかにし、同時に代表コース上の資源の組み合わせを分析した。そして、ヒアリングとコース上資源の分析結果を基に、4 つのタイプの代表区を比較した(図 2)。得られた結果から、本研究で分類したタイプの代表区におけるまち歩き観光の課題と自治体がより発展したまち歩き観光を今後展開するための要素を考察する。

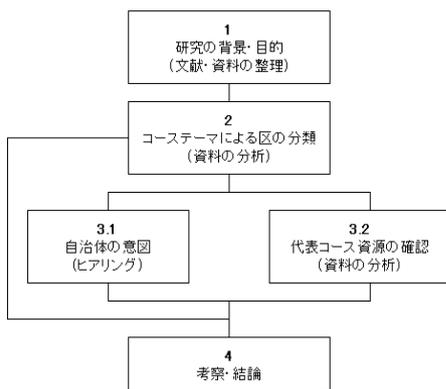


図 2 研究の流れ

2. コーステーマによる区の種類

(1) タイトルの分析

(i) タイトルから分析する意義

16 区、161 コースを分類し、自治体へのヒアリングとコース上の資源分析を行う区を抽出する。まず、

第 1 段階としてタイトルから各コーステーマのタイプを決定する。タイトルを基準にする理由として 1 つ目は、タイトルは、自治体が地域をどう認識し、その上でコースにどのような特徴をもたせているかということ判断する 1 つの指標と捉えたためである。2 つ目は、利用者側からみて、タイトルは利用者が内容を理解する第一段階であり、コースへのイメージを想起させる第一段階であると考えたからである。以上、2 つの理由において、タイトルを指標とした区の種類を行う。

(ii) 6 つの分類項目定義と 7 つのタイプ

161 コースのそれぞれのタイトルにおいて、各コースのテーマのタイプ分類を行った。まず、コースのタイトルがどのような特徴を有するか、タイトルを使われている文言から「地名、ストーリー性、歴史・文化、社寺、施設、緑・自然」の 6 項目において判断した(表 1)。社寺と施設は、物体としての「モノ」をイメージとして想起させる「点」的イメージを想起させる。一方で、地名、ストーリー性、歴史・文化、緑・自然は「面」的なイメージを想起させる項目である⁴⁵⁾。161 の各コースのテーマを最終的に「ストーリー型、地名型、歴史・文化型、緑・自然型、施設型、社寺型、複合型」という 7 タイプに分類した。

表 1 項目の定義

項目	定義
地名	特定の地域の名を示す。
ストーリー性	特定の軸に沿った物語を想像させる。
歴史・文化	過去の事象や人間が築き上げた産物を想起させる。
社寺	寺社・仏閣群、文化財を示す。
施設	公園や博物館・美術館などその他の特定の目的のための施設群を示す。
緑・自然	自然環境を想起させる。

(2) コーステーマによる区の種類

(i) 全体におけるコーステーマのタイプ数

地名型が 41 コース、ストーリー型が 34 コース、歴史・文化型が 27 コース、緑・自然型が 18 コース、施設型が 17 コース、社寺型が 15 コース、複合型が 9 コースという結果になった。数が一番多い地名型が全体の 25%、2 番目に多いストーリー型が 21% であり、過半数ではないがこの 2 つのタイプで 46% を占めている(図 3)。利用者の視点から見れば、地名

型やストーリー型は、社寺型や施設型とは異なりタイトルからはコース上の具体的な資源をイメージしにくいという特徴がある。「点」的テーマのコースではなく、「面」的なテーマのコースの数が多いことが分かった。

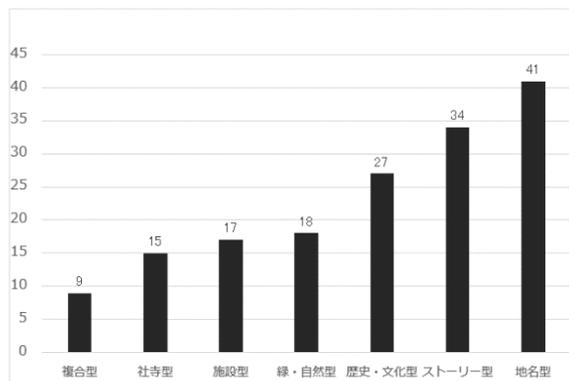


図 3 各タイプの総数(16区全体)

(ii) 該当タイプ数からみえる傾向

コース数が多い区はテーマのタイプが多様である傾向がある。北区を除いて、港区、台東区、足立区、豊島区、大田区、葛飾区はその傾向が特に強い。一方で、コース数が少ないと特定のテーマに偏っている。6コース以下の千代田区、板橋区、新宿区、練馬区、文京区、墨田区である(図4)。

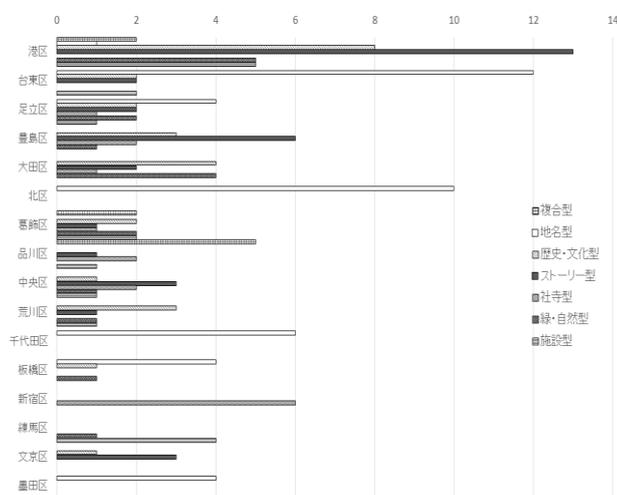


図 4 各タイプごとの数(16区ごと)

(iii) 区の種類

本研究においては、コーステーマのタイプが複数あり、一定のコース数を有するという条件の基で、分類の対象区を選定した。「(ii) 該当タイプ数からみえる傾向」より、10コース以上の7区(港区、台東区、足立区、豊島区、大田区、北区、葛飾区)を分類の対象区とした。分類は、各区の総コース数において1つのコーステーマのタイプが過半数を占める

区とそうではない区という条件で行った。結果、地名型(北区)、地名中心型(台東区)、ストーリー中心型、多様型(足立区、大田区、葛飾区)と4タイプに分類した。複数の区が該当するタイプは、タイプ内で最もコース数が多い区を代表区とした。結果、地名型は北区、地名中心型は台東区、ストーリー中心型は港区、多様型は足立区とした(表2)。

表 2 4タイプの一覧とコースタイトルの一例

タイプ	コースタイトルの一例
地名型(北区)	浮間エリア
地名中心型(台東区)	地名型: 浅草通りコース
ストーリー中心型(港区)	ストーリー型: 東京のシンボルを背景にしたロケ地が満載(六本木・赤坂エリア)
多様型(足立区)	地名型: 綾瀬編 綾瀬から北綾瀬コース
	歴史・文化型: 千住編 宿場のなごりを歩くコース
	緑・自然型: 花畑編~自然を満喫~やすらぎコース
	施設型: 綾瀬編 綾瀬公園一周コース

3. タイプ別まち歩き観光への期待とコース設定の実態

(1) 自治体がまち歩き観光に寄せる期待

4タイプの代表区の自治体担当者には「始めた時期、想定する利用者像、まち歩き観光に期待する効果、資源の選定、コースタイトルの付け方、おすすめコース、現状での課題点、今後の展開」という主に8つの項目でヒアリングを実施した。

(2) コース上の資源

(i) 代表コース

資源の分析は、資源に対する自治体の認識を把握するために、4区全体の平均距離のコースと各区における長距離のコースを代表コースとして扱う。4区の平均距離は4.4kmであるため、約4~5km範囲内のコースを対象にした^{注1)}。また、長距離のコースは約6~9km範囲内のコースを対象とした^{注2)}(表3・4)。

表 3 コースの距離

タイプ	最長	最短	平均
ストーリー中心型(港区)	15.7 km	0.75 km	4.5 km
地名中心型(台東区)	9.1 km	2 km	4 km
多様型(足立区)	8.9 km	2 km	4.7 km
地名型(北区)	5.8 km	2.9 km	4.9 km

表 4 代表コースの一覧

平均距離コース(約 4~5 km)		
タイプ	コースタイトル	距離
ストーリー中心型	坂を登りながら、観て考えて。愉しや高輪の坂道	3.8 km
地名中心型	浅草通りコース	3.8 km
多様型	宿場のなごりを歩くコース	4 km
地名型	田端エリア	4.8 km
長距離コース(約 6~9 km)		
ストーリー中心型	立身出世コース	7.2 km
地名中心型	上野から歩く下町散策コース	9.1 km
多様型	たっぷりじっくり森林浴コース	8.9 km
地名型	王子・滝野川エリア	5.8 km

(ii)資源の分析基準

4 タイプの代表区ごとに顕在的資源と潜在的資源の具体例を提示し^{注3)}、代表コース上の資源の確認を行った。

(3)比較からみる4タイプのまち歩き観光の位置づけ

(i)自治体のまち歩き観光に対する意図

ヒアリング結果を基に、4 タイプの代表区におけるまち歩き観光に対する意図を比較した(表5)。

「始めた時期・区の計画」、「想定する利用者像・期待する効果」は、4区とも共通していた。しかし、「区を知ってもらう」ことが1次的効果だとすると、2次的効果は、区ごとに違いがみられた。また、「資源の選定」、「タイトルの付け方」、「課題点と今後の展開」でも4タイプの代表区における違いがみられた。

表 5 自治体のまち歩き観光へ寄せる期待(4タイプの比較)

	ストーリー中心型 (港区)	地名中心型 (台東区)	多様型 (足立区)	地名型 (北区)
始めた時期 区の計画	・2004年~2007年の間 ・観光施策に関する計画 →区の訪問者、観光客の誘致			
想定する利用者像 期待する効果	利用者:特定の地域に限定せず 期待する効果:区を知ってもらう			
	リピーター 様々な魅力提供	リピーター 滞在時間増加	「住みたい」 と思わせる	消費活動
資源の選定	基準なし ※隠れた資源	根拠を明確 ※インターネットの情報を使用する際	職員が「花、歴史、文化」を基準に選定	基準なし
	業者への委託			
タイトル	キャッチコピー 親しみやすさ	浅草など観光地の ネームバリュー	キャッチコピー 分かりやすさ	行政区(7地区)を参考
課題点 今後の展開	情報発信方法 メールマガジン アプリ	マップの正確性や種類 ロゴ地巡り、 商業ベースのツアー	エリア別ではなく、 テーマ別 オリジナルまち歩き マップ	情報発信方法 現状維持

(ii)コース上の資源

平均距離コースの分析結果においては、4タイプの代表区ごとにコース上資源の傾向が読み取られる(図5)。ストーリー中心型の港区は、顕在的資源が6、潜在的資源が5であり、両者の数がほぼ半数という結果であった。同様の傾向を持つのが、多様型の足立区である。足立区は、港区の結果と同様で、顕在的資源が6、潜在的資源が5と両者の数がほぼ半々であり、資源の数比においては、港区と同じ傾向を持っているといえる。一方、上記2区(港区、足立区)と異なる傾向を持つのが、地名中心型の台東区と地名型の北区である。台東区は、潜在的資源が7割という結果から、浅草寺や上野公園以外に目を向けさせる意識は見られるものの、潜在的資源が寺社・仏閣のみということから、資源選定がやや極端と考えられる。また北区は、顕在的資源のみで8という結果であることから、エリア内の顕在的資源に偏るという傾向を持つタイプと考えられる。また、平均距離コースは、表6から分かるように4タイプの合計で、顕在的資源が24、潜在的資源で20という結果である。タイプごとに差異はあるものの、4タイプの全体で見ると、北区を除いて顕在的資源と潜在的資源のどちらか一方に偏っていないことが分かる。

次に、長距離コースの分析結果について比較する(図6)。長距離コースの資源は、平均距離のように各タイプの特徴を見出しにくく、共通して4タイプとも顕在的資源の数が極端に多いことが分かる。台東区、足立区、北区は、顕在的資源のみであり、港区は顕在的資源で約8割を占めている。特に、北区は平均距離、長距離のコースともに顕在的資源のみという結果となった。さらに、長距離コースは、表6の総計数から分かるように4タイプの合計で、顕在的資源が27、潜在的資源が1という結果である。4タイプ個別の顕在的資源と潜在的資源の各総計からも、長距離コースは、顕在的資源への依存が読み取れる。

平均距離コースと長距離コースという2つの大きな枠組みで比較をする(表6)。4タイプの平均距離コースと長距離コースの顕在的資源と潜在的資源の総計数に注目する。平均距離コースは、それぞれ顕在的資源が24、潜在的資源が20であり、両者を合わせて総計44である。一方、長距離のコースは、顕在的資源が27、潜在的資源が1の総計28である。また、4タイプの代表区ごとにみても、いずれの区も長距離コースの方が平均距離コースよりも資源の数

は少ない。以上から、本研究の分析結果において平均距離コースと長距離コースの資源数を比較すると、距離が短い平均距離コースの資源数が長距離コースの資源数より多いことが明らかとなった。

(iii)自治体におけるまち歩き観光の位置づけ

(i)と(ii)の比較結果を基に、4タイプの代表区の自治体におけるまち歩き観光の位置づけと資源の関連性を読み取る。なお、コース上の資源に関しては4タイプの特徴がみられることから、平均距離の資源の分析結果を参照する。

港区と台東区は、コース数の多さやまち歩き観光にビジョンへの位置づけなどからまち歩き観光を観光の側面から強く捉えた区とする。しかし、港区と台東区はコース上における資源に違いが見られた。港区は、顕在的資源の周辺にある潜在的資源を見せるようにしており、偏りがなく資源を選定していると考えられる。一方、台東区は上野公園・浅草寺以外に目を向けさせようという意識はあるものの、エリアで限定しているため、そのエリア内の資源(寺社、商店街)に偏り、多様性がみられない。ゆえに台東区は、浅草などの観光地名への依存が見られ、コースタイトルにも地名が多く反映されると考えられる。

足立区は、まち歩き観光に観光振興としての側面を持たせつつも、将来的に居住につなげるという効果も期待していることから、まち歩き観光を観光とまちづくりの両側面から捉えた区とする。足立区は集客力のある資源を持つ区ではないが、自治体の期待として、まち歩き観光をすることによって、住んでみたいと思わせることが目的にあるため、代表コース上の資源においても、顕在的資源ではあるが歴史のある医院や市場を資源として選定している。港区、台東区と比較すると観光振興のみを追求するのではなく、まちづくりとの関連性がみてとれる。足立区のコースタイトルのテーマは偏りがなく多様であるのは、観光として目立つ資源が少ないという点もあるが、将来住んでもらうきっかけづくりを目的に含んでいるため、まちの幅広い魅力を見せるという自治体の意識がコースタイトル及び資源に反映されていると考えられる。

北区は、まち歩き観光に対して、経済的な消費を期待していることと、区の計画への位置づけから、まち歩き観光に産業活性化の側面を持たせた区とする。資源の分析結果においては、顕在的資源に依存しているという結果であった。コースタイトルのテーマも地名型のみという結果から、エリアに存在する

顕在的資源に偏っているということが推察される。

北区は、区外の利用者には消費活動をまち歩き観光の効果として期待しているというヒアリング結果からも、自治体の産業振興を中心とした観光への取り組み姿勢がコースタイトルと資源に反映されていると考えられる。

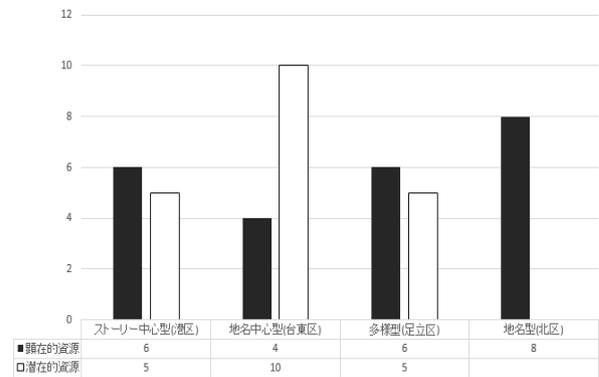


図 5 平均距離コース(約 4~5 km)における 4 タイプの比較

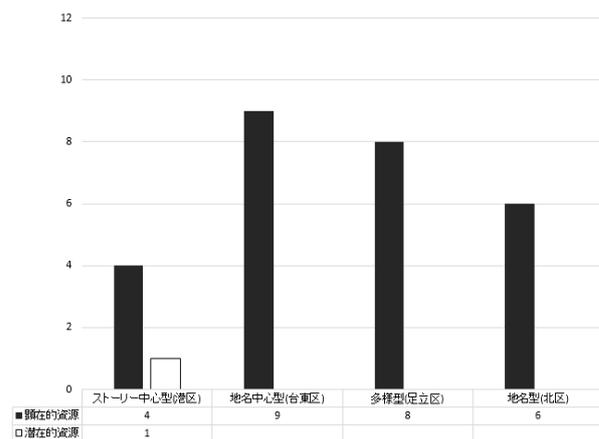


図 6 長距離コース(約 6~9 km)における 4 タイプの比較

表 6 資源数の一覧

タイプ	平均距離コース			長距離コース		
	顕在的	潜在的	総計	顕在的	潜在的	総計
ストーリー中心型(港区)	6	5	11	4	1	5
地名中心型(台東区)	4	10	14	9	0	9
多様型(足立区)	6	5	11	8	0	8
地名型(北区)	8	0	8	6	0	6
総計	24	20	44	27	1	28

4. おわりに

(1) 考察—まち歩き観光における資源活用の課題—

選定したまち歩きコース(平均距離)においては、2つの課題を見出した。1つは、資源の保存への意識である。本研究で選定した各自治体によるまち歩きコースは、資源を「見せる」ことに特化しており、資源をつなげることによる「保存」の意識は現状では低いと考えられる。2つは、モノを中心としたコースということである。まち歩き観光は、顕在的資源と潜在的資源の2つを連続的に体験させることに特長がある。特に潜在的資源は、特定の範囲のみにしか認識されていない資源であり、そのまち独自の魅力を楽しませる鍵となる。まちの個性的魅力を見せる高い可能性を秘めた資源の一例として「モノ」だけでなく状況「コト」を示す景観を挙げた。古来、日本においては、見る時間や場所なども含めた景観を観光資源として選定する例として八景があったように、景観や巨視点にとらえることが求められる地形は人々を惹きつける要素を有していた^{6)注4)}。しかし、本研究で選定した港区や足立区のコース(平均距離)は、数においては顕在的資源と潜在的資源のどちらか一方への偏りは無いものの、建物などに代表される「モノ」を見せる傾向があり、まち独自の魅力を有する資源の例である景観を資源として組み込んでいないと考えられる。

(2) 結論

魅力あるまち歩き観光の資源は、まちの歴史、自然、暮らしなどあらゆるものが対象となる。まち歩き観光は、文化財など顕在的資源のような広く認知された資源のみをつなげるだけではそのまち独自の魅力を伝えることはできない。公的には認められておらず、特定の範囲のみに認識されている潜在的資源を上手く組み込むことによって、まち歩き観光は、まちの魅力を最大限に楽しませることが可能なのである。特に、潜在的資源である景観は、スタート時間を自由に設定できるまち歩き観光においては、利用者に多様な見せ方や能動的な体験を提供する可能性を持つ。例えば、季節や時間によって変化するまちの様相は、施設や建物以外のそのまちならではの魅力であり、利用者個人の感性に訴えかけ、まちが持つ固有性への認識や新たな発見を促すことができるのではないのだろうか。また、まち歩き観光は、担当部署が観光関連である点からも資源を「見せる」ことへの意識は高いが、資源をつなぐことによる「保存」への意識は現状では低いと考えられることから、

資源の保存と活用の両側面を視野に入れた自治体内での複数部署間での連携体制構築が必要である。

まち歩き観光における資源は、顕在的資源だけに依存せず、多くの人を惹きつける資源に乏しくとも、そのまちならではの資源を巨視的視点からも開発し、その関係性を構築することによって顕在的資源の価値も強調されることが考えられる。そして同時に特徴的な地域の資源を保存していくという姿勢が、今後自治体におけるまち歩き観光にはより一層求められる。

参考文献

- 1) 安嶋博幸：日本の観光地の課題と再生への戦略、PRレビュー vol.18、pp.10-15、2006
- 2) 桑田正美：観光立国・立圏に果たすイベントの役割—地域ツーリズムと観光デザイナー、イベント学のすすめ、ぎょうせい、pp.86-99、2008
- 3) 米浪信男：都市景観と都市観光、神戸国際大学経営論集 28(1)、pp.1-24、2007
- 4) 溝尾良隆：観光学と景観、古今書院、pp.11-12、2011
- 5) 奥敬一・下村彰男・熊谷洋一：環境への認識を高める手法としてみた東京都内の都市散策路、造園雑誌 57(5)、pp.385-390 1994
- 6) 斉藤和広・渡辺貴介・天野光一：「八景」の観光的意味に関する研究、日本観光研究者連合全国大会研究発表論文集 No.5、pp.37-40、1990

注

注1) 港区の4つのコースは、公共交通機関が行程に含まれているため、平均距離の算出には含めていない。

注2) 長距離コースは、3区(台東区、足立区、北区)は最長距離を代表コースとして選定している。港区の最長距離のコースは、15.7 kmと他3区との距離数の差が大きすぎるため代表コースとはせず、約6~9 kmのコースを選定した。

注3) ヒアリングと各区の観光施策関連の計画書の内容を基にした。

注4) 参考文献4) pp.35-41、pp.60-61

13世紀後半に中国から「瀟湘八景」という水墨画が日本に伝わった。その後、日本では近江八景に代表されるように、各地で八景が選定され、その地の観光地化に大きな影響を与えたとされる。